

2017年度日本数学会出版賞受賞者のことば

「上智大学数学講究録」

(上智大学大学院理工学研究科理工学専攻数学領域)

この度は、「上智大学数学講究録」の出版活動に対して、日本数学会出版賞を頂き、まことに光栄に思います。ありがとうございます。本講究録の出版に携わった諸先輩方の活動が評価されたものと受け止めております。

本学数学教室については前号の「数学教室だより」で紹介し、その中でも本講究録について触れました。ここでは、2012年発行の「上智大学理工学部創設50周年記念誌」によって1977年に発刊された当時の経緯を紹介しますと、開設から10年経過したばかりの数学科の情報発信力を強くして研究教育を発展させるべく、その頃に着任された河田敬義教授が提案されたアイデアの中の一つだそうで、*Tokyo Journal of Mathematics* も同時期の創刊です。「講究録」という名は京大数理研講究録の名称を模したとのこと。寺坂英孝・南雲道夫・守屋美智雄三教授の最終講演会を機に、その記録をまとめた「数学のながれ」が第1巻として1977年3月に発行されました。

1990年頃までは年に2巻強、その後、ペースを落としながらも、2006年までに47巻が発行されました。和書の出版が増えたことや、インターネット上での研究情報の流通が一般的になったこともあり、近年ではその役割も縮小し、現在は大学リポジトリ(※)での公開に移行しています。授賞理由の中でも電子化の促進を促されており、書籍化などの理由でリポジトリでの公開を差し控えるものを除き、更に進めていく所存です。著者からの明示的な許諾がありますと円滑に進みますので、ご覧の著者の方には、許諾のご連絡を頂けると幸いです。

尚、現在新刊発行の予定はありませんが、本講究録を廃止したとは一言も言っておりません。いつかリポジトリ上にNo.48が公開される日を思いつつ。

※上智大学学術情報リポジトリ (Sophia-R)

<http://www.sophia.ac.jp/jpn/research/seika/repository>

角皆 宏
今年度数学領域主任

松本 幸夫 氏

この度、思いがけず日本数学会出版賞をいただき、大変名誉なことと喜んでおります。ご推薦下さった方を始めとして関係する皆様に厚く御礼申し上げます。

私の書いたいくつかの入門書を評価していただきましたが、一番初めに書きましたのは「4次元のトポロジー」という本で、1979年に「数学セミナー増刊」という形で初版が出ました。当時はまだ4次元トポロジーの爆発前夜でしたので、初等的な「ロホリンの定理」の紹介だけを目標にしてこんな本が書けたくらいです。この本が出た数年後から4次元トポロジーの目覚ましい発展がはじまり、私の本も次々に新しい話題を取り込んで結構長く増刷してもらえたのは幸運だったと思います。もうひとつ「多様体の基礎」という本は、亡くなられた杉浦光夫先生のお勧めで書き上げました。学生時代にいろいろな教科書を読むたびに、「論理は追えてもイメージが湧かない」というもどかしい思いを何度も経験しましたので、学生時代の自分自身に家庭教師をするような気分で書きました。とくに「何々は明らかである」というような言い方をできるだけ避けるように心がけました。著者として書いていると、もうここまで説明したのだからいくらなんでもこれは明らかだろう、という気分になるのですが、書いているほうはそう思っても、読んでいる人に今までの内容が全部伝わっているとは限らないわけで、実際、学生時代に「明らかである」と突き放されて「自分はなんて物わかりが悪いんだろう」と悲観的な気分になったこともありました。1988年の初版ですが、まだ教科書として使っていただけのように、昔の自分に家庭教師をするという書き方が結構よかったのではないかと思っております。もし時間が許せば、また同じような気分の入門書を書いてみたいと思っております。

どうもありがとうございました。

松本 幸夫
東京大学名誉教授

中村 義作 氏

このたび日本数学会出版賞を受賞し、非常に光栄に存じております。大学では電気工学を専攻したため、数学は趣味の域を出ないのですが、このような立派な賞を著名な先生方と肩を並べて拝受し、恐縮の至りにございます。ここに、数学との出会いを簡単に披歴して、お礼の言葉に代えさせていただきます。

私が数学に興味を覚えたのは、中学で2次方程式の解法を習ったときです。先生が「もっと進むと、3次方程式や4次方程式にも一般解法はあるが、5次方程式にはないんだ」と話してくれたのです。なんでも群論という数学を使うと、そのことが証明できるというので、その内容が知りたくなり、神田神保町の本屋街に出かけていきました。何軒か歩いたのちに『群論』という本を見つけたので、なかをパラリとめくると、最後の第5章の最終ページに「5次以上の一般の方程式を代数的に解くことは不可能である」という定理が太いゴシック体で載っているのです。定価の16円より安かったので、早速に買いました。しかし、読み始めると内容が高度で、とても理解できません。ただ、5次方程式の解は、加減乗除と根号だけでは求められないという事実だけを知りました。

この本の著者は竹内瑞三先生で、共立出版から予約販売された晩近高等数学講座の1冊を単行本に改訂したもので、高校生や大学生になってからも何回か読み返し、ようやく理解することができました。そこで、同じ系列の単行本を何冊か購入しましたが、このことが数学の魅力に取りつかれた一因と考えています。なかでも、高木貞治先生の『近世数学史談』は、私に大変な刺激を与えてくれたことをよく覚えています。

中村 義作
静岡県立大学名誉教授